

## 日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本小児血液・がん学会

理事長 大賀 正一

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 小児期の造血器腫瘍をはじめとする血液疾患の病態解明と治療法の確立

日本小児血液・がん学会では、出生後小児期に発症する白血病・リンパ腫などの造血器腫瘍の病態解明と治療法の確立を目指して 1970 年代後半から全国でグループ研究を開始し、治療成績を向上させてきた。白血病・リンパ腫のほか、乳児白血病、造血障害、組織球症、止血血栓異常などの血液疾患に対して、全国規模で活動を展開し、臍帯血移植を含む造血細胞移植を進め、欧米の成績をこえるものも少なくない。この数年で CAR-T 療法などの免疫療法が小児急性リンパ性白血病に導入され、分子標的療法とともに治療革新の時代を迎えている。がんゲノム医療の実装は、がん素因などに関する新たな課題の克服にむけて、本学会活動を深化させている。

② 小児期の固形腫瘍の病態解明と治療法の確立

神経芽種と脳腫瘍などの稀少腫瘍に対しても 1980 年代後半から全国でグループ研究が開始され、病態解明に関連して診断や層別化の進歩とともに、がん種ごとの治療成績を向上に貢献してきた。造血器腫瘍と固形腫瘍はその稀少性から全国規模の疾患登録と層別化治療研究が早期から始まり、2011 年に日本小児血液学会（1960 年設立～）と日本小児がん学会（1985 年設立～）が統合され発足した本学会は、小児領域の Tumor board を実現し、がんゲノム医療における造血器腫瘍との協調と連携を臨床研究レベルで進めている。

b. 当該領域における国際的な役割

小児領域特有の造血器・固形腫瘍と血液疾患の治療成績の向上をめざして、早期から開始した各グループ研究と治療開発の成果は国際的にも高く評価されている。1998 年と 2018 年に国際小児がん学会 (SIOP) 学術集会を本邦で開催するなど国際学会にも貢献している。また、アジアを中心として発展途上国の小児血液・がん疾患の診療援助や学術交流を進めている。わが国特有の臍帯血移植など造血細胞移植技術とゲノム医療の進歩は、個別医療を推進するとともに、がん素因や遺伝性疾患を考慮して診療を行ってきた小児領域がかかえる課題 (AYA 世代と移行期医療) とその克服に関しても、先進的な役割を果たすことが

期待される。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

小児血液・がん疾患の後進の育成および診療体制のさらなる改善を目指し、小児血液・がん専門医制度を運営している。Pediatric cancer survivor とともに稀少で多彩な遺伝性血液疾患の患者も長期フォローアップの重要性と移行期医療の在り方が課題となっている。AYA 世代の支援はがん治療を終えたものと新たに発症したものに対して、小児と成人領域の統合的医療の重要性を再認識させるものである。多職種医療連携と小児慢性特定疾患と指定難病の連続性に関する学術的基盤に、本学会が果たす役割はますます大きくなると考える。

d. 学会運営上留意している点

本学会は多彩な稀少遺伝性疾患と生命予後の不良な悪性疾患の小児を対象とすることから、小児科、小児外科以外を専門とする整形外科、脳神経外科、放射線科、病理などの専門医・臨床医および治療医学の開発・実践に関わる医学研究者のほか看護師を含む医療スタッフなど多彩な職種の会員が存在する。患児を中心として、長期フォローアップ、倫理的課題や緩和ケアまで専門領域の融合と医療人の多職種連携による包括的活動を推進しながら学会運営を行っている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

基本領域である日本小児科学会とその分科会のほか、日本小児外科学会、日本血液学会、日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、日本造血・免疫細胞療法学会、日本血栓止血学会などの日本医学会分科会と連携して合同シンポジウムの開催、各種ガイドラインの作成及び改訂を行っている。ゲノム医療に対応し、現在成人・小児進行固形がんにおける臓器横断的ゲノム診療のガイドラインを日本癌治療学会および日本臨床腫瘍学会と編集している。AYA 世代や移行期医療の支援については日本小児科学会およびその分科会と連携し活動している。生殖医療と周産期領域に関しては日本産婦人科学会と連携している。臨床研究や社会広報活動では NPO 日本小児がん研究グループ (JCCG) との連携を継続しながら全国規模で行っている。がんゲノム医療が実装され、造血器・固形いずれの腫瘍においても二次所見の取り扱いなどがとくに小児領域では重要課題となるため、臨床遺伝専門医や臨床遺伝カウンセラーと遺伝カウンセリングの拡充に努めている。